

卒後2年目看護師の主体性をひき出す関わり

—「経験」と「省察」を手がかりに—

キーワード：経験・省察・成人教育・アンドラゴジー

西6病棟○石橋和美 松葉夕佳 山根理恵子

はじめに

疾病構造の変化や医療の高度化、患者ニーズの多様化などにより看護師に求められる役割や期待は高まっている。このような医療を取り囲む環境の変化が大きい中で、F病院は急性期病院として病院改築を目標にハード面・ソフト面の整備に取り組んでいる。F病院は2000年よりキャリア開発ラダーを導入し合わせてレベル別教育プログラムを実施し看護師の人材教育を行っている。A病棟（脳センターと耳鼻科・形成外科混合病棟）に配置されている卒後2年目看護師はレベルⅡの修得要件である救急看護講座「緊急時の看護」の実践を年間目標として主体的に取り組み、課題を達成しつつある。

成人教育においては学習する側が学ぶ主体として学習に取り組む。おしえる側は、学習援助・学習支援の専門性を発揮する主体として学習の実現に取り組む。両者が主体となり互いに同じ目標に向かって対等で異なる立場から共同作業していくことが必要である。集合教育とOJTを連動させて、学習者である卒後2年目看護師の学習を実現するのが部署の看護管理者、指導者の役割である。成人教育理論の中からアンドラゴジーモデル、「経験」と「省察」を手がかりに卒後2年目看護師の主体性を促した要因を分析し支援のあり方について評価したので報告する。

I. 研究目的

A病棟に配置された卒後2年目看護師の主体性を促した要因を分析し支援のあり方を明らかにする。

II. 用語の定義

アンドラゴジー (andragogy) : andos 成

人 agogos 指導するの合成語。

アメリカのマルカム・ノウルズが1960年に提唱した。「大人の学習を援助する技術と科学」と定義した。子供を対象とする教育が教師指導型学習が主であるの対し、成人教育は成人自らが学習に方向づけを行う自己主導型学習が望ましいという考え方。

省察 (reflection) : ドナルド・ショーンによると何らかの行為後に自分が行ったことを客観的にその行為の正当性や的確さを見つめることと定義される。

III. 研究方法

1. 調査期間：2008年4月～12月

2. 調査対象：F病院に勤務しA病棟（脳センター・耳鼻科・形成外科混合病棟）に配置されたラダーⅠを取得した卒後2年目看護師7名

3. 調査方法：①成人教育の主要概念である「経験」「省察」の視点から研究者が作成した自記式アンケートを「緊急時の看護レポート」提出後に実施した②卒後2年目看護師が課題達成のために実施した勉強会③勉強会後に発行された「2年目便り」④「緊急時の看護レポート」を分析対象とする。アンケートの内容としては(1)緊急時看護修得のための個人の取り組みについて(2)急変・緊急に遭遇した際の状況について(3)企画した勉強会について(4)今後の課題の4つのカテゴリーから成る。

4. 分析方法：アンドラゴジーモデル、「経験」と「省察」をもとに考察する。

5. 倫理的配慮：対象者に本研究の主旨を書面で説明して理解を得た。配布したアンケート用紙は無記名で個人が特定されることはなく、知り得た情報は本研究以外には使用しないことを説明して同意を得た。

IV. 結果および考察

1. 卒後2年目看護師の勉強会における経験と学びについて

アンケート(1)(3)の結果より(表1)月当番を決め不定期ではあるが自分たちが決めたテーマに沿って主体的に勉強会を開催し、その内容を「2年目便り」(表2)として発行している。院内で受講が義務づけられている研修以外に心電図、人工呼吸器、救急外来への院内留学、挿管シミュレーションなどでどれも自分が希望して参加している。それに加えて表2に示す勉強会を行っている。2年目看護師は決められた期限内に提出すべき課題があり「緊急時の看護」を学習するレディネス(準備状態)が備わった状態であったと言える。またF病棟の特徴から、重症患者・急変患者の率が高く緊急時看護を修得しておかなければ職業人としての役割を果たせないという差し迫った危機的状況を自分の体験と他者の経験から実感している。アンドラゴジーモデルによると成人学習は内的要因によって学習の動機づけがされると言われている。これは自己実現や達成感を得るという目的での学習である。主体性を促した要因として、自分たちの職業に直接重要と思われるテーマについて学習の関心を示し差し迫った場面に役立てるために学ぼうとした。もう一つの要因として1年時よりメンバー間の連携が良く共に学ぶことが出来ていたことから、2年目となり学習のゴールがより明確化した。各自の経験と知識を共有しようというグループダイナミクスの力がさらに加わり主体的な学習行動がとれていたものと思われる。

2. 急変時・緊急時の場面における経験と学びについて

7名それぞれが何らかの緊急の処置を要する場面に遭遇している。(表3参照)アンケート(2)(4)の結果より、『頭が真っ白になり何をしたらいいかどうか動いたらいいか

分からず怖かった』という気持ちを全員が持っていた。先輩に指示をされ外回りや記録を担当している者、先輩と一緒にその場で処置を介助した者と、担った役割はそれぞれであった。勤務後にスタッフ同士でその場面の振り返りを行っておりそれをもとにプロセスレコードを作成し緊急時の看護としてレポートをまとめているケースが多い。振り返りを行った先輩看護師の指導の視点としては、行った処置一つ一つの意味づけその処置がなぜ必要だったのか、観察項目は何か、急変時に対応するために日頃から何を行っておくべきなのかを当人たちに気付かせるというものであった。振り返り後の2年目看護師の反応としては、『振り返りを行ったことで先輩看護師の動きがわかった』『自分を客観的に見ることができ、できることとできないことが明確になり次の課題がわかった』『急変時の対応や処置の流れなどその意味がわかり救命のスキルを看護師として身につけておくことの重要性を実感した』という回答が得られた。7名の学習者にとってせつかく遭遇した急変という「経験」が有意義で有効なものへと質的に高められるには「省察」が不可欠であるのだ。日々の勤務を思い起こしてみても夜勤終了後に休憩室で談笑しているスタッフの姿が目にとまる。何気ない会話であるが夜勤での出来事を言葉で表現することでお互いの労を労っている。夜勤を終えたという達成感、事故の反省、次の夜勤への取り組み方につながる広義の意味での省察を無意識のうちに行っているのではないか。急変時に行動をとともにした先輩看護師からの教育的関わりと自分からすすんで振り返ろうとする内省的刺激によっての省察が経験したことを意味づけ、価値づけていく。経験を振り返ることで経験を意味づけ積み重ねていくことができる。過去の経験こそが学習を重ねる上でのリソースとなり次に

同じ場面やそれを超える場面に遭遇したときに解決の手がかりとなりやすい。病棟内に必要に応じた振り返りを行うという習慣があり日々の中で自然と繰り返され、定着していると評価できる。

Ⅲ. 結論

1. 急変・緊急という「経験」が「省察」により2年目看護師にとって意味のある体験の積み重ねとなる。それが関心や意欲、向上心を引き出す。それに相まってラダー修得の為の与えられた課題が達成したい自分の目標となり学習の意味づけや必要性、価値などを見出すことができ、主体的学習の動機づけを促進したと考える。

2. 今回の研究を通して「省察」の重要性が明らかになった。当病棟において自然と勤務終了後の会話の中で「省察」を行っていた。今後は意図的に「省察」を行う場を設けていくことが必要である。また、指導者は学習者の個別性を捉えながら対象者に合わせた支援を効果的に行っていく必要がある。

Ⅳ. 参考文献

- 1) 渡邊洋子：「おとな」を「おしえる」という考え方のすすめ，Nursing BUSINESS，2007， Vol.1.no.4
- 2) 渡邊洋子：成人教育学の基本原理と提起—職業人教育への示唆—，医学教育，2007，38(3)
- 3) 渡邊洋子：シミュレーション学習に活かす成人教育理論—「経験」「省察」をてがかりに—，救急医学，2007，31
- 4) 谷脇文子、近藤裕子：卒後2~3年目の看護師の臨床能力の発展における経験の振り返り第34回看護管理，2003

表1 アンケート結果

- (1)緊急時看護習得のための個人の取り組みについて
 院内研修会への参加：挿管シミュレーション、救急外来への院内留学、ME研修、
 災害研修、ACLS コース
 院外研修会への参加：人工呼吸器研修、心電図研修
 参考書での学習、救急カート内の薬剤・物品の学習、急変場面へ積極的に参加、急変を想定してのイメージトレーニング
- (2)急変・緊急時に遭遇した際の状況について
 ・いつもと違う病棟の雰囲気を感じた・どうしよう何をしたらいいのか頭が真っ白になった
 ・患者の状態に動揺した・すごく緊張した・自分だったら動けるだろうか？
 ・介助に入りたいが外回りにあたり確実にできることをやろう
- (3)自分達で企画した勉強会について
 企画した理由は？
 ・何も勉強していない状態では何を学べばいいか分からないと思ったし、それをみんなですること
 意欲的になれると思った。
 ・同期であり同じことに躓いたり、疑問を感じるだろうし、話し合ってみんなで解決できれば学びを
 共有できる・同期の急変の事例を聴いて知識、技術ともに必要だと感じた
 ・救急事例をとる上で必要性を感じた・挿管介助についたことがなく、流れや根拠を確認する必要が
 あった・学びの共有、情報提供の場となった。
 ・呼吸器についての知識が浅く、今後リカバリー係をしていくうえで重要だと思った。
 勉強会の効果は？
 ・分からないことをみんなで共有できた・情報交換を行えた・それぞれの悩みや疑問を共有できた。
 ・知識を増やせた・呼吸器・挿管介助の流れ、根拠、使用方法が再確認できた。
 ・わからない事が明らかになり、勉強の必要性を感じた。
- (4)今後の課題
 ・急変時にすぐ動けるようになること・アセスメント能力を高めること・後輩への指導
 ・自己学習を進めていくこと・看護観を深めること・呼吸器に対する理解を深めること・場数を踏む

表2 勉強会テーマ・2年目便りの内容

日付	勉強会のテーマ	2年目便りの内容
1回目（6／12）	・気管切開患者の管理 ・Aナースの救急事例の振り返り	・役割分担 ・勉強会の検討
2回目（7／24）	・Bナースの救急事例の振り返り ・救急カートについて	・第1回勉強会のまとめ ・次回のテーマについて
3回目（8／27）	・耳鼻科外来振り返り	・第2回勉強会のまとめ 次回：呼吸器・IVH準備介助
4回目（10／28）	・Cナースの救急事例の振り返り	・第3回勉強会のまとめ 次回：挿管介助・人工呼吸器
5回目（11／18・29）	・挿管介助 ・人工呼吸器について	・第4回勉強会のまとめ ・次回のテーマについて

表3 2年目看護師が取り上げた緊急時看護の事例のタイトル

A	緊急時の一場面に焦点を当て、緊急時に必要な看護について考察したこと
B	夜勤帯における突然の急変から死亡確認までの緊急時の看護
C	再挿管・人工呼吸器装着となった患者の緊急時の看護
D	呼吸状態、循環動態が悪化した患者への看護
E	けいれん時の看護
F	気管内挿管時の看護
G	脳梗塞にて救急搬送されt-PAを行った患者への対応